

河口荘惣社 本荘春日神社

あわら市郷土歴史資料館

一般展示室企画展示ゾーン

本荘地区は、奈良興福寺の荘園だった河口荘の中心地として栄えていた地域で、そこに今もある春日神社は平安時代に勧請された由緒ある神社です。しかし戦国時代の戦乱で本殿などが焼失してしまいましたが、地域の努力により江戸時代に再興されました。その後も修復をしながら現在まで伝わり、平成23年に福井県指定文化財（建造物）に指定されました。長い月日を経たせいか、傷みがひどくなったため、3年をかけて修復を行い、昨年もと通りになりました。このたび、その修復が完了したことを記念して、本荘春日神社をテーマにした展示を行います。本荘春日神社の歴史を振り返ると共に、神社の宝物を展示します。普段目にすることができない資料もありますので、多くのお客様に見ていただければ幸いです

1 河口荘と坪江荘

河口荘・坪江荘は共に興福寺の塔頭・大乘院の荘園で、二つあわせて北国荘園とも呼ばれており、興福寺が所持する荘園の中でも屈指の規模を持っていました。

河口荘は康和二（1100）年に一切経転読料所として白河法皇より当初は奈良春日大社に

寄進されました。十の郷から成り立っており、細呂宜郷の外は竹田川より南で開発された地域（現在のあわら市、坂井市）でした。天永元（1110）年には奈良春日大社より神霊が勧請され、各郷に春日神社が建立され現在まで続いています。

坪江荘は後深草上皇が春日大社神前において法相宗の僧侶による三十講を行う為、正応元（1288）年に寄進され、大乘院が相伝しました。主に竹田川より北で開発された地域で、西は三国湊（現坂井市三国町）東は坪江（現坂井市坂井町坪江）辺りまで想定される広大な荘域を持っていました。その後、金津辺りを境に上郷と下郷に分かれましたが、厳密にどこが境かはよくわかりません。

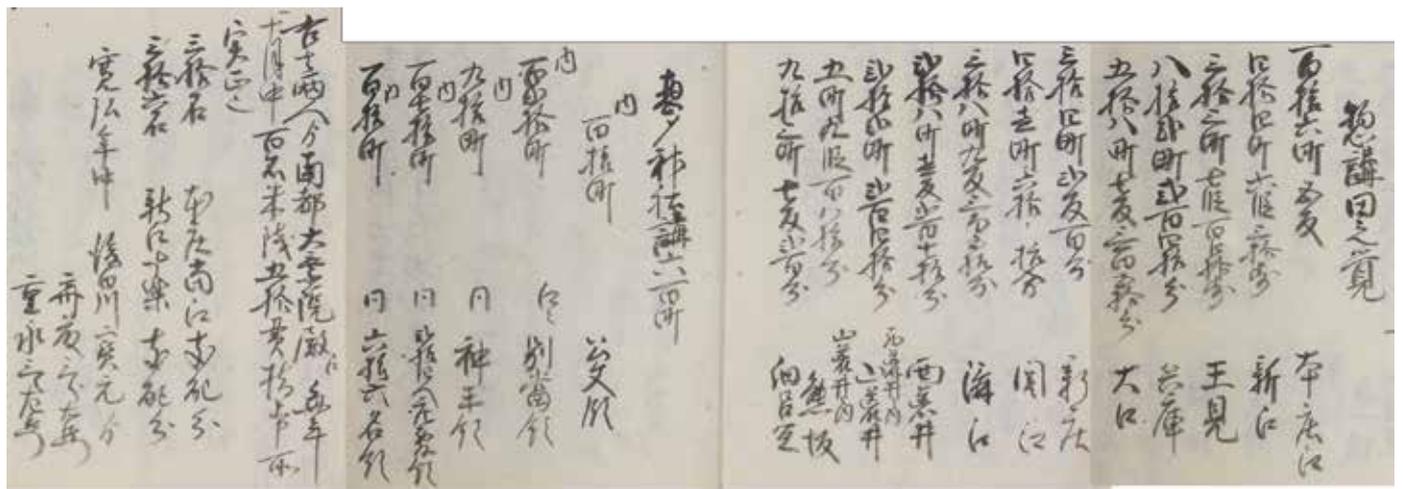
河口荘・坪江荘 想定地



2 河口荘の広さ

河口荘は十郷より成り立っていますが、どのくらいの広さがあったのでしょうか？下掲の文書を読み解くと、講田が全部で六百町歩あったと記されています。この当時の一町を現在の面積に換算すると、約1.16haになりますので、なんと700haもの耕地面積があったこととなります。中でも本庄郷は、十郷全体の六分の一の面積を占める広大な耕地を持っていました。

ただし、これらの数字は荘園成立当初のもので、その時期より200年近く後の弘安十(1287)年の田地引付によると、河口荘全体で約千百六十七町歩(約1,353ha)、本庄郷だけでも約二百九町歩と、おおよそ倍の面積を持っていました。積極的な新田開発が行われていたことが伺えます。



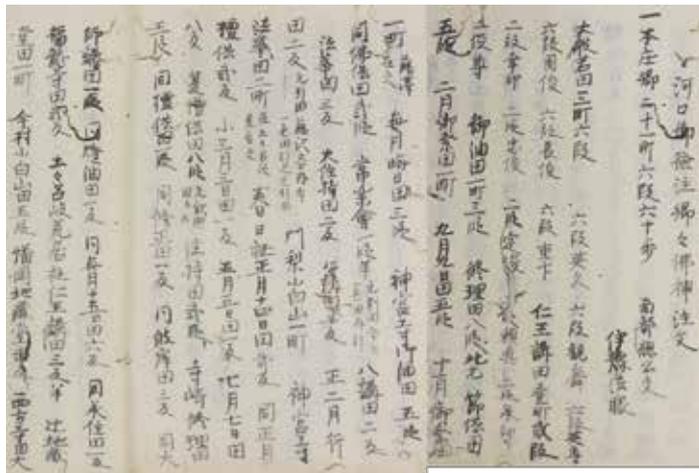
「惣講田の覚写」(江戸時代、個人蔵)

| 惣講田之覚 | |
|----------------------------------|----------|
| 百拾六町五反 | 本庄郷 |
| 四拾四町六段拾歩 | 新郷 |
| 三拾三町七段百四拾歩 | 王見 |
| 八拾貳町貳百四拾歩 | 兵庫 |
| 五拾八町七反三百五拾歩 | 大口 |
| 三拾四町貳反百歩 | 新庄 |
| 四拾壹町六拾 拾歩 | 関郷 |
| 三拾八町九反三百五拾歩 | 溝江 |
| 貳拾八町壹反貳百七拾歩 | 西荒井 |
| 貳拾貳町貳百四拾歩 | 山荒井 |
| 五町九段百八拾歩 | 熊坂 |
| 九拾三町七反貳百歩 | 細呂宜 |
| 惣ノ神社講田六百町 | |
| 内 百拾町 | 公文領 |
| 内 百貳拾町 | 郷之別当領 |
| 内 九拾町 | 同神主領 |
| 内 百七拾町 | 同貳拾四人庄官領 |
| 百拾町 | 同六拾六名領 |
| 右者兩人右南都大乗院殿江毎年十月中百石米錢五拾貫指上申所 実正也 | |
| 三拾石 | 本庄當郷支配分 |
| 三拾六石 | 新郷十楽支配分 |
| 寛弘年中 | 後白川實元右 |
| | 齋藤三郎右衛門 |
| | 重永三郎右衛門 |

3 年貢の使い方

本庄郷の講田は百拾六町ありますが、そこから得られる年貢のすべてが興福寺に送られた訳ではありません。荘官などの給料分や、次ページに掲載されている文書に記されている仏神田などは除外されていました。

仏神田とはその郷内にあてられている他の寺社領等です。在地で行われる神事や年中行事に使われていたことが伺えます。



「河口御検注郷々佛神田注文写」

(『春日神社由緒記』所収)、江戸時代、個人蔵)

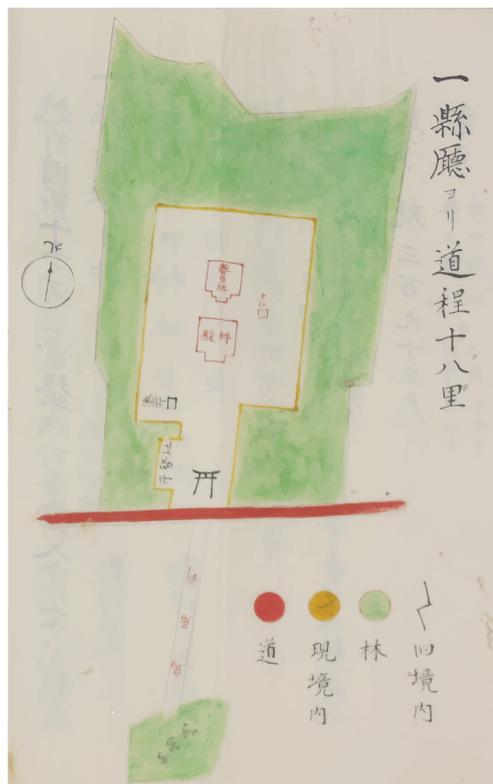
一本庄郷二十一町六段六十歩 南都総公文 伊豫法眼

大般若田三町六段 六段英久 六段觀舜 六段英尊
 六段圓俊 六段長俊 六段重印 仁王講田壹町貳段
 二段幸印 二段忠俊 二段定俊 二段頼真 二段承印
 二俊尊 御油田一町三段 修理田八段 此元節供田
 五段 二月御祭田一町 九月九日田五段 十一月御祭田
 一町 毎月晦日田三段 神宮寺御油田五段
 同佛供田式段 常案會一段半 八講田二反
 法華田三反 大住持田二反 八講田二反 正二月行
 田二反 門梨小白山一町 神宮寺
 法華田二町 春日社正月十四日田貳反 同正月
 檀供式反 小三月三日田一反 五月五日田一反 七月七日田
 八反 基僧供田八反 住持田貳段 寺崎修理田
 五段 同壇供田一段 同修正田一反 同彼岸田三反 同大
 師講田一段 同燈油田一反 同毎月十五日田六反 同承住田一反
 福龍寺田貳反 土々呂岐荒居社仁王講田三反半 辻地藏
 堂一町 今村小白山田五段 幡岡地藏堂貳反 西方寺田大

4 本荘春日神社

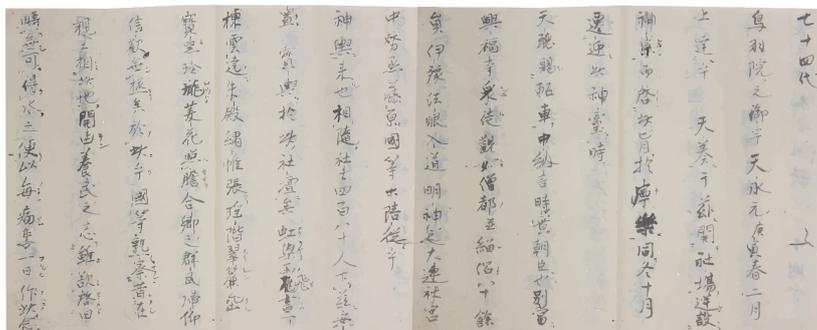
春日神社は奈良市春日野町に本社があり武甕槌命・経津主命・天兒屋根命・比売命の四神を祭神とする藤原氏の氏社です。同じく藤原氏の氏寺である興福寺と関係が深く、藤原氏や興福寺縁の荘園に春日神社が勧請され、荘園経営に春日大明神の神力を利用することが多くありました。

本荘地区は興福寺塔頭・大乘院の荘園、河口荘にあったので、春日神社が勧請されました。春日神廟記によると天永元(1110)年に興福寺の僧侶と春日大社の社士、合せて約500名で下向し、河口荘内の十郷にそれぞれ春日神社を建立しました。本荘春日神社はその十社の中心として父神ともいわれ、地域で格別の扱いを受けていました。



「河口御検注郷々佛神田注文写」

(『春日神社由緒記』所収)、江戸時代、個人蔵)



『春日神廟記』(江戸時代、個人蔵)

七十四代
 鳥羽院之御宇天永元庚寅春二月
 上達干 天奏テ茲開社場逆設
 神宇而啓此旨於寧樂同冬十月
 遷迎此神靈時
 天聰賜輅車中納言時實朝臣也別當
 興福寺衆徒觀如僧都並緇侶八十餘
 員伊豫法眼入道明神之大連社宮
 中務丞藤原国等等陪從テ
 神輿来也相隨社士四百八十人下茲安
 置 寶輿於此社壇矣虹梁雨飛書下
 棟雲達朱殿繡帳張瑤階翠簾
 寶器玲瀧芙花照膽合郷之群民俯仰
 信欽無極矣於此乎比国等熟察昔在
 親王相此地開由養民之志雖欲啓田
 疇無可得水之便以每 一日作此念
 (以下略)

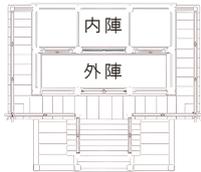
5 本殿の建築



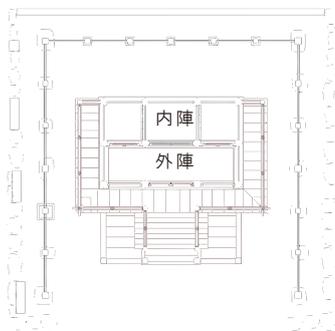
「本荘春日神社本殿」(福井県指定文化財・建造物)

画像提供：写真の光友

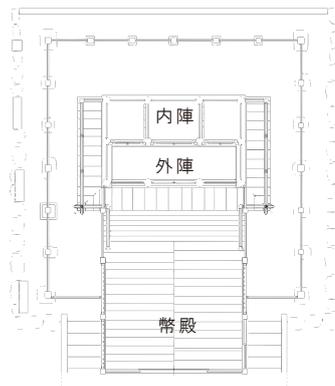
本荘春日神社の建造物に関する資料は少なく、江戸時代より前のことはよくわかっていません。同時期に勧請された他地区の春日神社や周囲の状況から、天正年間(1573～1592)の戦乱で建物などが焼失したものと考えられます。現在の本殿は元禄十二(1699)年に再建されたもので、三間社流造に屋根は柿葺という神社建築で、この建築様式では福井県内で4番目に古い建物です。覆屋や幣殿、拝殿等の増築に伴い(変遷は下記平面図参照)、改修が加えられてきましたが、今回の修復で本殿は建設当初の様式に復元されました。



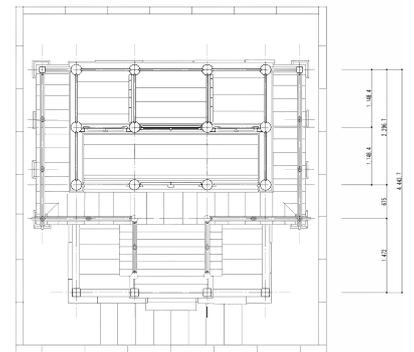
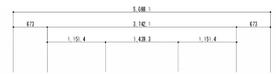
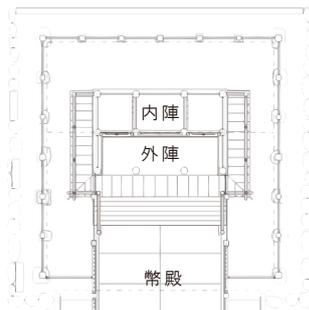
建設当初
【元禄十二(1699)年】



覆屋建設
【天明六(1786)年～】



幣殿増築
【江戸時代末期】



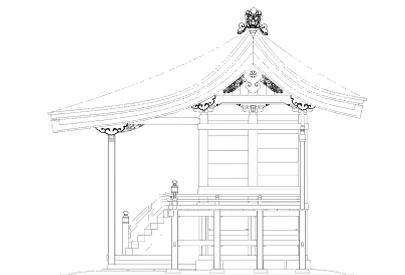
修復後本殿平面図



大正11年～修理前
(拝殿・廊下は昭和39年改築後の図面)



修復後正面立面図

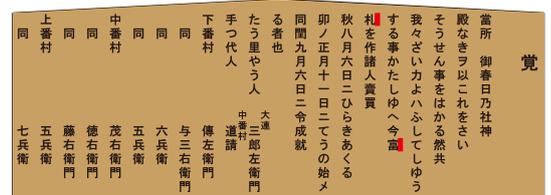
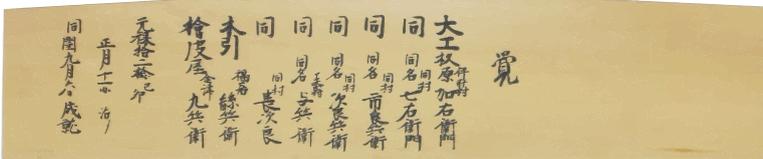
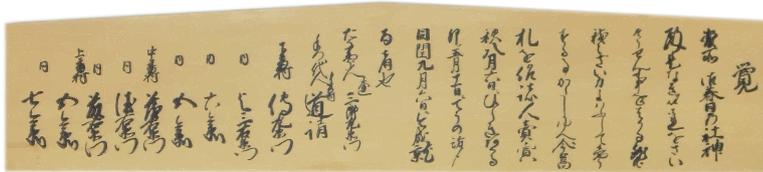


修復後側面立面図

図面：『本荘春日神社本殿修復工事報告書』本荘春日神社建設委員会(国京克巳編)平成28年3月

6 神社の資料

(1) 本殿再建時棟札



本殿再建時の棟札（複製、本荘春日神社蔵）

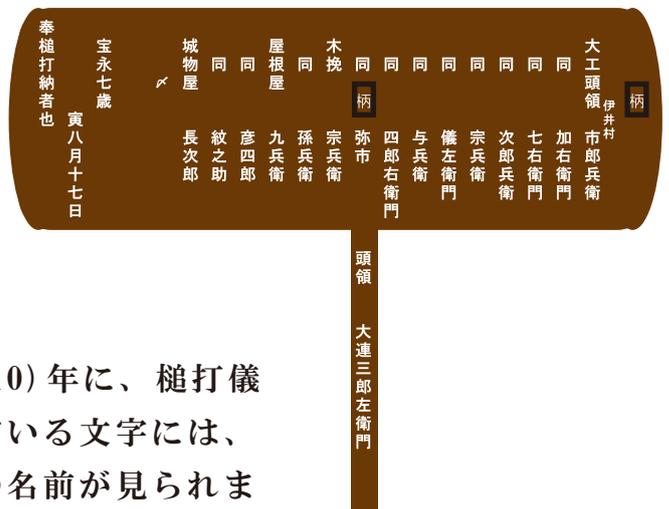
本殿を再建した時の棟札が見つかっています。それにより、いつ、誰が、どの様にして再建したのかが知ることができました。注目すべき点は「富札」によって、資金が集められたことと、伊井大工の手によって本殿が建てられたことです。

富札による寺社の建設では、福井県内で最古の事例です。

(2) 奉納された槌



奉納槌（複製、本荘春日神社蔵）



この墨書がされている槌は、宝永七（1710）年に、槌打儀式のために奉納されたものです。書かれている文字には、本殿建築に関わった伊井大工や、屋根屋の名前が見られます。

どの建物を建設したときに奉納されたのか、定かではありませんが、大工・木挽・屋根屋の人数が本殿のときより多いことから、拝殿建設時のものではないかと考えられます。他にも巴や宝珠の描かれた槌も残されています。

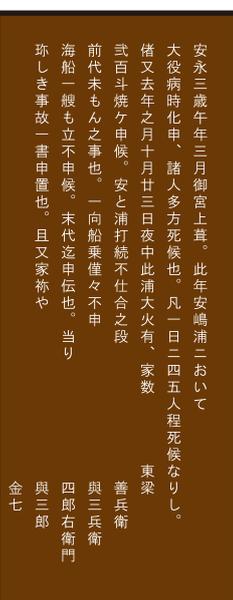
(3) 墨書柿板

柿板とはスギ等を厚さ2mm、長さ20cm程度の大きさに薄くはいだ板のことで、社寺の屋根を葺くのに用いられました。

本殿修復の際に外した柿板を調べたところ、墨書のある板が見つかりました。多くは職人の手習いで書かれたようでしたが、中には屋根の葺替え時期や、その当時の世相を記したものがあり、昔の事を知ることのできる貴重な資料です。



墨書柿板
（本荘春日神社蔵）



安永三（1774）年に屋根が葺替えられたことと、その年に安嶋浦（現坂井市三国町安島）で疫病と大火があったことが記されている。

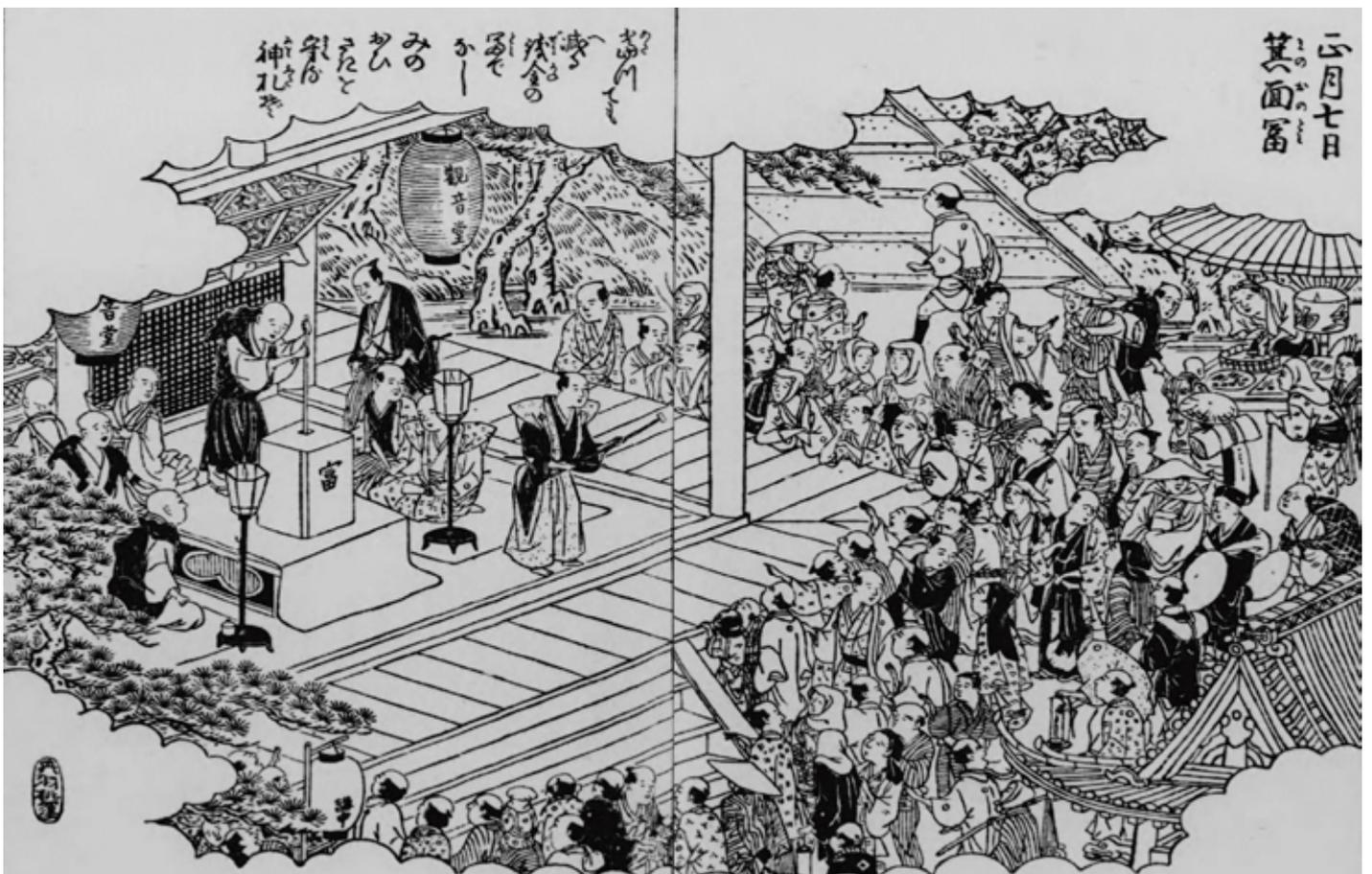
7 富札

本荘春日神社の本殿は「富札」によって資金を集め、再建されたことが棟札に書かれています（展示品参照）。では、「富札」とはなんですか？これは現在でいう宝くじ券のことです。木札に名前を書いて箱の中に入れておき、その箱に錐を突き入れて抽選したことから、このような興行を富突または突富と呼び、この時販売された札を「富札」といいました。多くの資金を集められることから、寺社の修復のため開催されることが多かったようです。しかしながら博打性の高さから、江戸幕府は一般で富突きを行うことを禁止したり、寺社で開催するのも許可制にしたりしています。

お札の販売は様々なところで行われ、本荘春日神社の場合はあわら市周辺で販売していたようで、前谷村での販売記録が残っています。このときは3月に販売を始め、8月1日に突札の予定でしたが、札が集まらなかった為延期され、8月6日に突札が行われています。



三国滝谷寺が発行した富札
個人蔵（丸岡歴史民族資料館寄託）



箕面瀧安寺で行われた富突の様子（『摂津名所図会』【国立国会図書館蔵】）

8 神社の文化財

本荘春日神社には本殿以外にも多くの文化財が残されています。普段公開されていないものもありますので、それらを含めてご紹介します。

阿弥陀如来立像



本像は本荘春日神社の中尊で、来迎相は中品下生の形を取っており、この形をしているのは、県内では本像だけです。高さは95cmで、様式から鎌倉時代末期のものとして推定されます。整った刀法と静定的で温和な表現は慶派の手法に通じていて、春日神社の故地、南都（奈良）との深い関係がうかがえます。

市指定文化財
（彫刻）

薬師如来立像



本像は、平安時代の頃から神仏混淆の形で信仰されていたものと考えられています。高さ39cmの小像ですが、螺髪は京都嵯峨野の清涼寺式で、文化の広がりを知る上で貴重な像です。

市指定文化財
（彫刻）

ヤブツバキ



市指定文化財
（天然記念物）

樹高11.9m、幹廻1.7mあるツバキの巨木です。この付近の集落では、昔は屋敷林にツバキを植えて、種子から油をとるなどして生活に利用していました。

神鏡



承応二（1653）年正月
前原正勝作 銘

鰐口



延宝四（1676）年
加賀国治工 渡部藤兵衛政高 作
下番村 北嶋四郎兵衛寄進 銘
本来仏具である鰐口が残されているのは、神仏習合の名残です。

神輿



寛延四（1751）年
大工 三国湊尾崎三左衛門
塗師 新助 作

神輿



天保十五(1844)年
三国 井田龍造 作

掲額



福井藩十六第藩主
松平春嶽公 揮毫

越前狛犬



左側面後脚銘
「□□□六年□巳八月十七日奉寄進」

左側面前脚銘
「河口庄春日惣社大明神堺隼人□用武」

隨身像



慶応四(1866)年、山田鬼斎 彫刻、平沢塗

越前狛犬とは福井県産の凝灰岩、いわゆる笏谷石を使用し、一定の様式(台座に座るなど)を満たしているもので、16世紀初頭から江戸時代の終わりぐら

いまでに制作された狛犬を指します。本荘春日神社の越前狛犬は複数体ありますが、本来阿吽で対をなすところを、別々の個体が単独で残っています。

展示されている資料には左側面の前脚と後脚に銘が彫られています。残念ながら正確な年号はわかりません。髪型、姿勢、尻尾の形状などから、最古級の16世紀前半につくられたものと、推定されます。

石造十二神将像



十二神将は天衣甲冑の武将姿で、薬師如来の十二の願いによって現れた分身ともいわれています。時代が下ると十二支が配され、方位や昼夜を護る神となりました。この石造十二神将は昭和44年に本荘春日神社と龍雲寺の間の杉林から、なかば土中に埋もれた形で発見されました。石の素材は笏谷石で、彫りの様子から江戸時代のものと推定されます。しかし11体しか見つかっておらず、また頭頂に彫られている十二支と所持している武具などの様式が合わないことなどから、残念ながら個体事の識別ができていません。



あわらし郷土歴史資料館

福井県あわらし市春宮二丁目14-1金津本陣 IKOSSA 2階

電話：0776-73-5158 FAX：0776-73-1038